北海道言語文化研究 北海道言語研究会
No. 15, 135-145, 2017.

岡山方言イントネーション序説

三村竜之

Preliminary to the Intonation Study of Okayama Dialect of Japanese

MIMURA, Tatsuyuki

ABSTRACT: The aim of this short paper is to report the results of the preliminary field research the author conducted into the intonation of Okayama dialect of Japanese, and thereby raising some related issues. The main points drawn from the discussion based on the research are summarized as follows: (i) both interrogative and non-interrogative sentences, including imperative ones, fundamentally have a global falling tonal pattern; (ii) interrogative sentences, both yes/no- and *wh*-questions, are formed by means of sentence-final particles ‘ ン ’ and ‘ ノン ’, the latter of which is used in negative interrogative sentences; (iii) interrogative sentences/utterances may exceptionally have a global rising, non-falling tonal pattern in the following three cases: i) when an interrogative sentence lacks an interrogative particle for some reasons; ii) when a hearer intends to request a speaker to repeat what he or she has just uttered; iii) when a speaker intends to remind a hearer of something or to reconfirm something.

Keywords: sentence-final tones, intonation phrases, interrogative sentences, sentence-final particles

1. 序

1.1. 本研究の背景と目的

岡山県南部方言（後述; 以下、岡山方言とする）は、アクセントに関する研究は比較的豊富である一方、イントネーションに関する研究は皆無に等しい。近年、標準語は言うに及ばず日本語諸方言に関してもイントネーションの実態が明らかとなりつつある一方で、岡山方言に関しては未だにイントネーションにまつわる基本的な事実すら記述されていない。

このような背景を踏まえて筆者は、母方言話者としての内省観察とインフォーマント調査によって得られた資料に基づき、岡山方言のイントネーションの実態について報告を行った(拙論 2016b)。特に疑問文のイントネーションに焦点を当てて、文末音調の型と意味の関係など疑問文イントネーションの諸側面を明らかにするとともに、諸方言に関する先行研究が着目してきた種々の観点に基づき、岡山方言のイントネーションの類型論的な位置づけを試みた。

同拙論には多くの貴重な意見や批判が寄せられた。そこで本稿では、寄せられた意見や批

判に基づき拙論の論点を整理し直すとともに、岡山方言のみならず方言イントネーション研究において今後解決すべき幾つかの課題並びに問題点を提起する。

1.2.　本研究の資料

本小論で考察の対象とする「岡山方言」とは、広義には岡山県南部で使用される方言を指す[1]。但し、沿岸部や島嶼部（図 1 の地図の円で囲んだ箇所）は内陸部とは異なるアクセント体系を有しており(虫明 1954: 7, 1982: 76-77)、それに伴いイントネーションも内陸部とは異なる可能性があるため、本稿でいうところの南部方言には含めていない点に注意されたい。

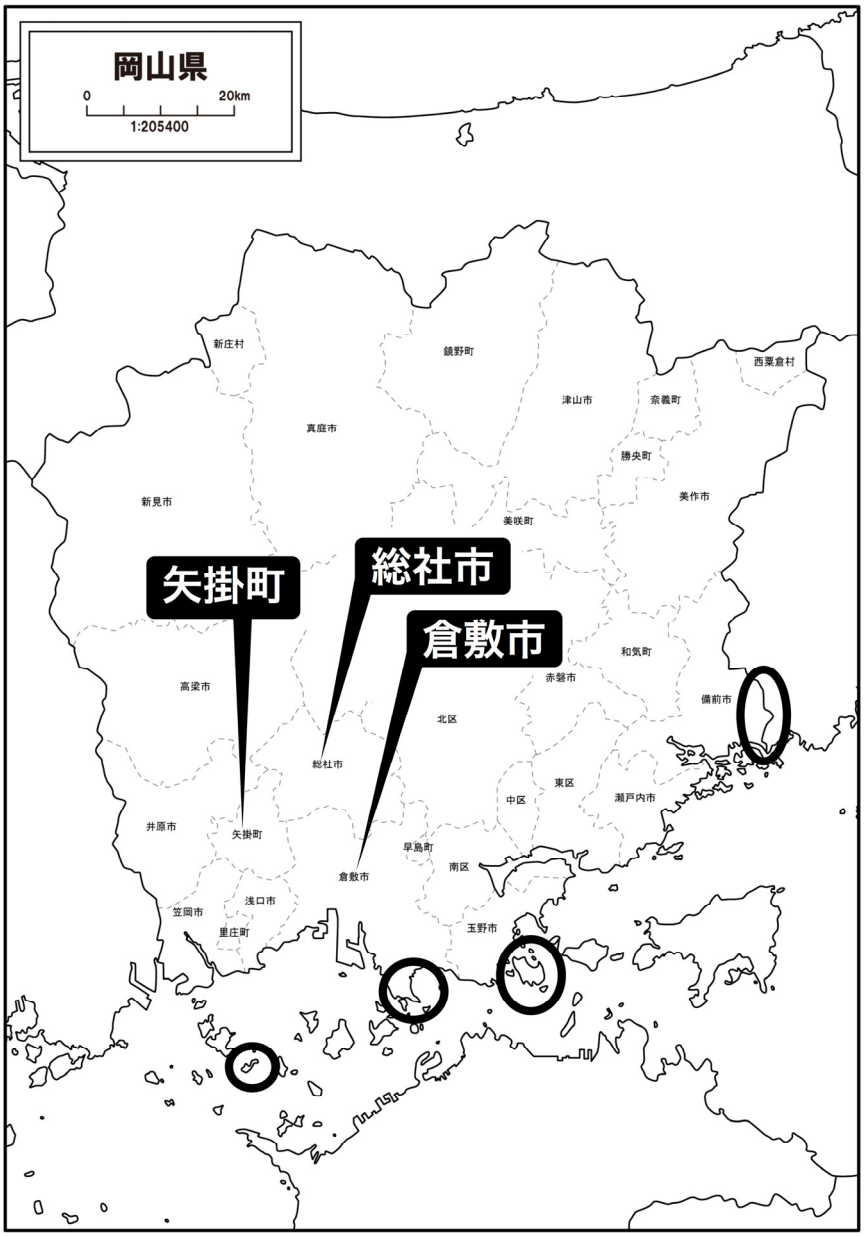

図 1

本稿で引用する資料は筆者の内省観察とインフォーマント調査に基づいている。筆者の内

[1] 後述するインフォーマントの出生地並びに旧国（令制国）名に基づけば、本研究で扱う岡山方言は「備中南部（備南）」で使用される方言と位置付けることができよう。

省観察により得られた資料を、インフォーマント調査（2016 年に実施）を通じて確認並びに修正・補足作業を行った。筆者並びに調査協力者[2]の情報を以下に記す:

(1) a. **筆者:**

1976 年生（倉敷市亀山）。12 歳まで倉敷市亀山。12 歳から 18 歳まで岡山市今（現: 北区今）に居住。父は高梁市旧川上郡、母は総社市宍粟の生まれ。祖父母との居住歴は無い。

b. **協力者:**

KM 氏（女性）

1932 年生（総社市宍粟）。発表者の実母。結婚を機に倉敷市と岡山市に居住。県外での居住歴は無い。

TM 氏（男性）

1969 年生（岡山市）。筆者の実兄。2 歳から 18 歳まで倉敷市亀山に居住。埼玉県草加市（4 年）と広島県福山市（3 年）に居住後、岡山市北区今に在住。

インフォーマント調査では、木部 (2008) や前川 (1997) の例文を参考にして作成した標準語の文を岡山方言に直してもらうという手法も用いた。なお、調査の一部始終はインフォーマントの許諾を得た上でデジタルレコーダー（Marantz 社 PMD661MKII）を用いて録音した（サンプリング周波数 96kHz; マイクロフォン: audio-technica 社 AT899）。

また、自然談話の資料として、国立国語研究所 (2004).『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第 14 巻 鳥取・島根・岡山』も参考にした（1979 年、小田郡矢掛町内田にて収録; 話者: 女性 1919（大正 8）年生（収録時 60 歳）、男性 1918（大正 7）年生（収録時 61 歳）； cf. p. 138, 152）。

1.3. 先行研究

岡山方言は、虫明 (1954) や角道 (1984 など) を始めとして、アクセントに関する先行研究は少なくない。一方、イントネーションに関しては、藤原 (1972: 67 など) が文末詞（終助詞）との関連で文末音調に関してわずかに触れているに過ぎず、それを除けば先行研究や調査報告は寡聞にして知らない[3]。なお、アクセントやイントネーションに限らず、岡山県の方言全体に関する研究史は虫明 (1982) や十河 (1973) が詳しい。

因みに、岡山方言のアクセントは、所属語彙に差異は見られるものの、東京方言と同じく下げ核の位置と有無により拍（モーラ）数プラス 1 個の型が区別される多型アクセント体系（Pn = N + 1 (Ivić 1970: 287)）である。

(2) a. ハ]ガ[4]「葉が」、サ]メ「鮫」（標準語: ハガ=、サメ=）

b. ナ]ツガ「夏が」、モミ]ジ「紅葉」（標準語: ナツ]ガ、モ]ミジ）

---

[2] インフォーマントとして尽力してくださったお二方にこの場をお借りして心より御礼を申し上げる。
[3] タルボット (1979) にはイントネーションという用語が散見されるが、全てアクセントの誤りである。
[4] 上野 (2002: 164, 171) に倣いアクセント核を‘]’で、また無核であることを‘=’で示す。

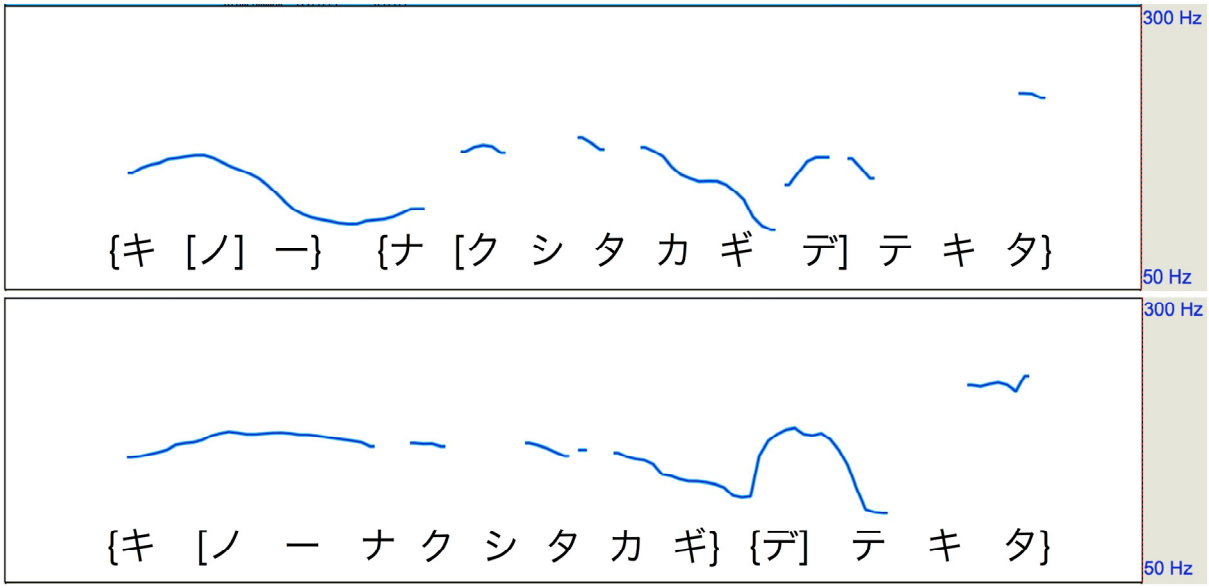

図 1:「昨日無くした鍵が出てきた。」のピッチ曲線（上: 出てきたのが昨日; 下: 無くしたのが昨日）

2.　岡山方言のイントネーション

2.1 記述の枠組み

木部 (2008: 443) は、諸方言に適用可能な一般性の高い調査方法と記述の枠組みがイントネーションに関しては確立していないことを踏まえ、方言イントネーションを捉える共通の枠組みとして、1) 句、2) 句構造（フォーカスを含む）、3) 文末の三つのレベルでの記述を提案している。本研究でもこの枠組みに基づき、1) 句の音調と修飾構造（句の切り方）、2) 文末音調の二点に関して考察を進める。

2.2. 句の音調と修飾構造（句の大きさ・切り方）

ここでの「句」とは、いわゆる東京方言に関して提唱されている「音調句」に相当するもので、上野 (2003: 62; 2002: 166) に倣えば「意味に応じて伸縮自在な長さを持つ一息に発音したまとまり」と規定できよう。この規定に基づけば、文を構成する語句同士の修飾構造の差異は句の大きさや切り方の差異として現れることが予想される。従って、ここでは、句の音調と修飾構造を合わせて扱うこととする。

東京方言と同様に、岡山方言も句の切れ目は句頭における音調の上げによって示され、頭高型であれば一拍目が、中高型であれば二拍以降が高くなる（但し、二拍目の自立度が低い（拗音や撥音等の）場合は中高型であっても一拍目から高くなることがある[5]）。また、句の大きさ（句の切り方）も東京方言と同様、意味内容に応じて比較的自由に決めることができる。具体例を以下に示す（‘[’で句頭の上げを、‘{ }’で句を示す; 図 1[6]も参照）：

[5]自然談話資料として参照した国立国語研究所(2004)の付属 CD では、二拍目の自立性が高くとも一拍目から高く始まる事例が少なからず観察される。世代差が関与するものと思われる。（第 3 節も参照）。

[6] ピッチ曲線は読者の理解の一助として示したものであり、厳密な音響分析を目的としたものではない。従って、ピッチ曲線抽出の際に使用したソフトの算出ミスも修正はしていない点に注意されたい。

(3)「昨日無くした鍵が出てきた。」

a. {キ[ノ]ー} {ナ[クシタカギデ]テキタ}【出てきたのが昨日】

b. {キ[ノーナクシタカギクシタカギ} {デ]テキタ}【無くしたのが昨日】[7]

2.3. 文末音調

2.3.1. 疑問文以外の文

ここでは便宜上、いわゆる平叙文や命令文など、疑問文ではない文をまとめて扱うこととする。平叙文、命令文、感嘆文のいずれも文末には下降調[8]が現れる（↘で下降調を示す）:

(4) a. キ[ノーナクシタカギデ]テキタ↘「昨日無くした鍵が出てきた。」(=(3b))

b. [ハ]ヨーシネ]ー ↘「早くしなさい。」

c.ヨ[ーユワン]ワー ↘「到底言葉になりません。」

なお、(4b) の命令文に丁寧な意味合いを付け加えると (5) に示した文となり、文末音調は下降調のままである:

(5) [ハ]ヨーセ[ラレ]ー ↘「早くしてください。」

少なくとも文末音調に関しては、岡山方言には丁寧さとの相関関係 (例: 木部 (1997: 249)) は見られないようである[9]。

2.3.2. 疑問文

まず具体例を以下に示す（次頁の図 2 も参照されたい）:

(6) a. 疑問詞疑問文:

i.キ[ノ]ー ナ[ニヲ(～ナ[ニュー)タ]ベタン↘「昨日何を食べたのですか。」

ii. ア[シタ ド[コエ(～ド[ケー)イク]ン[10]↘「明日何処に行くのですか。」

b. yes/no 疑問文:

i. キ[ノ]ー [ナン]カタ]ベタン↘「昨日何か食べたのですか。」

ii ア[シタ クラシキ]イク]ン↘「明日倉敷に行くのですか。」

c. 否定疑問文:

[ナ]ンモタベ]ンノン↘なにも食べないんですか？」

(6) から岡山方言の疑問文に関して次の二点が明らかとなる: i) 疑問詞の有無を問わず文末詞を用いて作り、「終止形＋ン」と「否定形＋ノン」の何れかの構造をとる[11]; ii) 文末の音調

---

7 標準語の文を岡山方言に訳してもらう手法をとったためか、方言形の「ノーナシタ」ではなく「ナクシタ」が用いられているのに加え、発話自体もテンポが遅くややぎこちない印象を受ける。(第 3 節も参照)。

8 これ以降用いる「下降調」(「上昇調」も同様）という用語は、必ずしも一拍内での音調の下降（あるいは上昇; いわゆる contour tone）を指すものではなく、複数の拍に渡る漸次的な音調の下降（上昇）も含む点に留意されたい。また、特に後者の意図を強く押し出すべく、「非上昇調」や「非下降調」という用語も用いている点に注意されたい。

9 筆者やインフォーマントの内省観察に反して、「下降調はぞんざいで上昇調のほうが柔らかく響く」という意見を頂いた(私信: 米田信子氏, 2016 年 12 月 4 日)。岡山県内部での地域差の可能性が考えられるが、性差を含めた個人差という可能性もありうる。詳細な調査が必要である（第 3 節も参照)。

10 拙論(2016 b: 398 (6a.ii))の音調表記は筆者の誤記。

11 疑問詞疑問文では文末詞を用いる代わりに動詞の仮定形を用いることもあるが(「疑問詞の係結び」cf. 虫

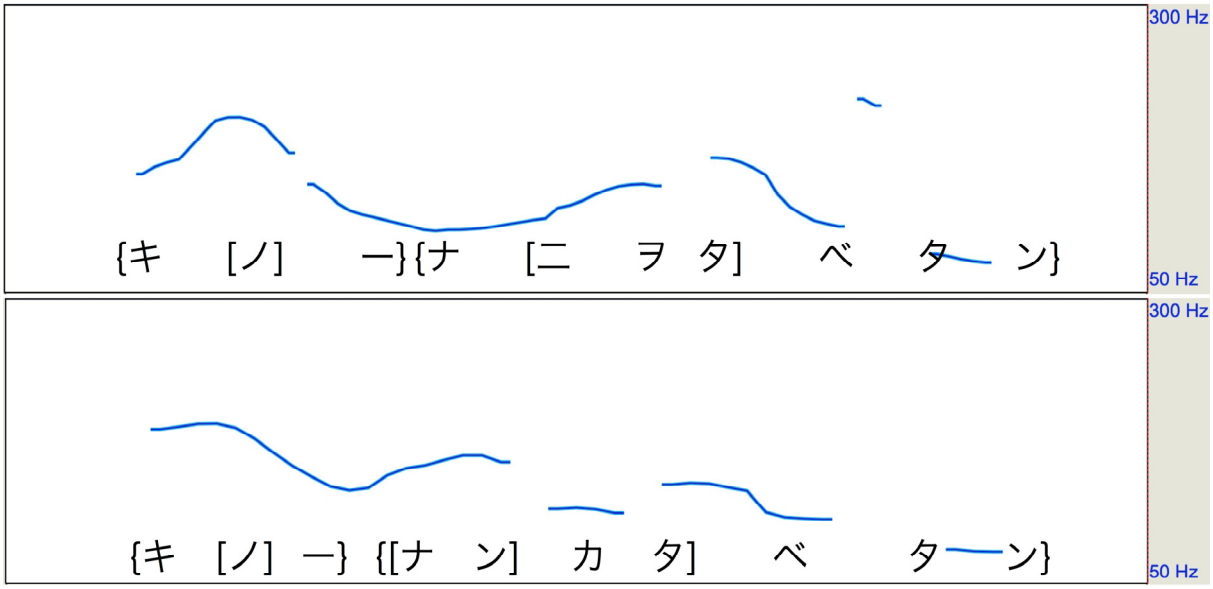

図 2: 疑問詞疑問文と yes/no 疑問文のピッチ曲線

は疑問詞の有無や否定か否かを問わず下降調（非上昇調）である[12]。

岡山方言の疑問文の構造と文末音調を以下にまとめる:

(7) **疑問詞疑問文**:

文の構成要素（疑問詞含む）＋ 文末詞「（ノ）ン[13]」＋ 下降調（非上昇調）

yes/no 疑問文:

文の構成要素（疑問詞無し）＋ 文末詞「（ノ）ン」＋ 下降調（非上昇調）

2.4. 疑問文の意味と上昇調（非下降調）

疑問文（質問を意図した発話）であるにも拘らず文末音調が上昇調（非下降調）をとる事例が現時点で三つ確認されている。まず第一に、何らかの理由により疑問の文末詞を欠く場合、文末音調は上昇調となる:

(8) a. (i) キ[ノ]ー　ナ[ニヲ(〜ナ[ニュー)タ]ベタ↗「昨日何を食べたのですか。」

(ii) キ[ノ]ー　ナ[ニヲ(〜ナ[ニュー)タ]ベタン↗「【同上】」　(=(6a.i))

b. (i) ア[シタ　クラシキ]イク↗「明日倉敷に行くのですか。」

(ii) ア[シタ　クラシキ]イク]ン↗「【同上】」(=(6b.ii))

文末詞を欠くと平叙文と形式上の区別がなされないために、言うなれば文末音調を上昇調にすることで同音異義の状態を回避していると解釈することもできるかもしれないが、そもそ

明 1982: 100-101)、今回の調査では例は得られなかった。

12 隣県の広島方言では、疑問詞疑問文は文末が下がるが yes/no 疑問文は文末が上がるという（木部 (2013: 23-24)）。

13 標準語におけるいわゆる「ノダ文」と「非ノダ文」との対応から考えて、岡山方言の「（ノ）ン」を疑問の文末詞として捉えるのは妥当ではないという指摘を頂いた（私信: 小西いずみ氏, 2016 年 12 月 4 日）。後述（第 3 節）する文末詞の意味記述とも関連する重要な問題であり、詳細な調査が求められる。

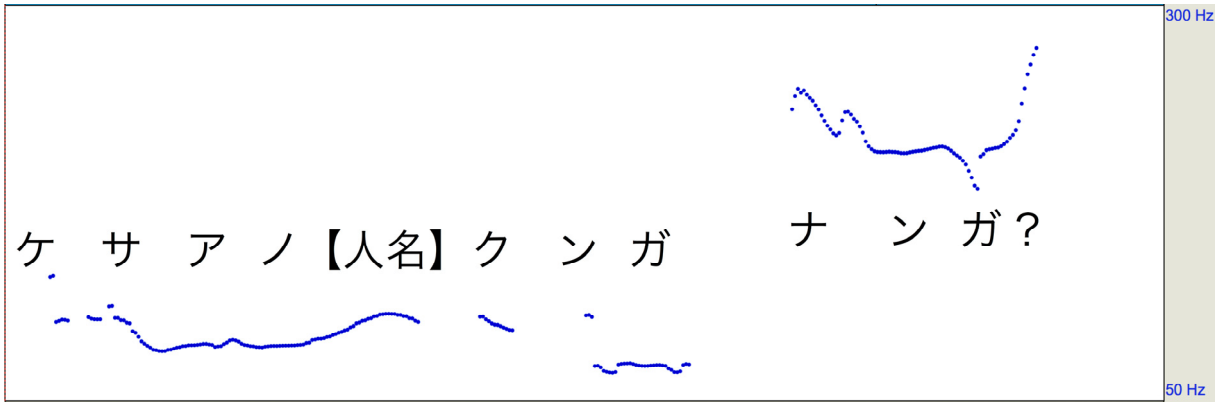

図 3: (9b) の「ナンガ？」のピッチ曲線
（国立国語研究所 (2004) 付属の CD を音源として作成）

も、文末詞が使用されない理由は現時点では不明である。また、容認度に年代差や個人差、性差があるかもしれない[14]。

第二に、対話の中で相手の発言が聞き取れず、例えば「はぁ？」や「何が？」と問い返す場合には、上昇調（非下降調）をとることもある（筆者並びにインフォーマントのいずれの内省観察でも下降調も可; ‘]]’は拍内下降を指す）：

(9) a. (i)（今年は雨が多いですね。）[ナン]ガ[15]↗ (〜[ナンガ]]↘)「何が（多いの？）」
(ii)（来年、岡山に行きます。）ド[コヘ↗ (〜ド[コヘ]]↘)「何処へ（行くの）？」
b. 男性: ナンカ シモンタニガ オイーユーテ イヨータノー ケサ アノ【人名】クンガ。
「なんか下の谷が多いと言っていたな、今朝あの【人名】くんが。」
女性: ナンガ？↗「なにが？」
男性: ミズガ。「水が。」 (国立国語研究所 (2004: 153); 表記を一部改変)

東京方言の感覚からすれば「問い返し」が上昇調であることはおそらく至極自然であるかもしれないが、岡山方言は下降調をとることもあり、諸方言における「問い返し」の音調の実態がいかなるものか興味深い。

因みに諸外国語に目を向けても、「問い返し」の音調が下降調である言語は存在する。日本で最も馴染みのある外国語である英語は、*What?* ↗ あるいは *Excuse me?* ↗ のように「問い返し」の際には上昇調が現れるが（(10)を参照）、最も馴染みがあるゆえにこれがあたかも普遍的であるかの如く誤解されてはいまいか[16]。例えば、筆者の比較的精通している外国語

---

14 因みに、筆者の内省観察では文末詞を欠いた疑問文は不自然であり、極めて標準語的な響きを感じる。なお、広島方言との関連から「不確実な情報に関する質問の場合は「ン」は使わないのではないか、かつその場合は上昇調ではないか」との指摘を頂いた（小西いずみ氏, 2016 年 12 月 10 日）。同様の指摘は査読者からも寄せられた先述の「ン」の文末詞としての位置付けとも関連する重要な問題である。

15 拙論(2016: 399 (9a.i))における表記「[ナン]ガ」は誤りである。

16 三省堂刊の『言語学大辞典第 6 巻 術語編』(亀井ほか 1996)には「疑問文では文の末尾を上げ、平叙文では下げるという現象は、おそらくあらゆる言語にみられる普遍的なものであろう」(p. 83) との記述が見られる。

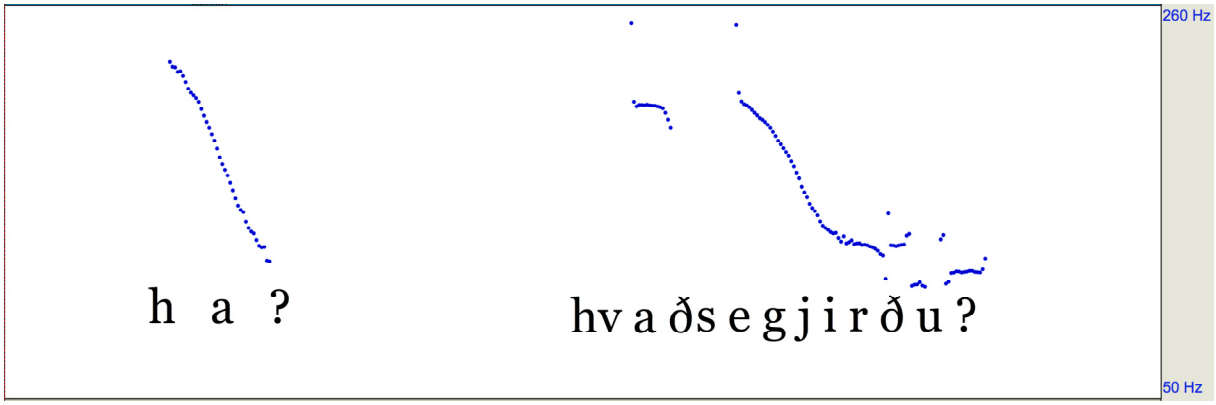

図 4: アイスランド語における問いかけの音調のピッチ曲線

の中からアイスランド語を例に引く。アイスランド語の疑問文は疑問詞の有無を問わず非上昇調を取り、「問い返し」の場合も同様に非上昇調である:

(10) アイスランド語[17]

a. *Ha?* [háː ↘]「えっ？・もう一度お願いします。」

b. *Hvað segirðu?* [kʋa(ð) sɛ́ɲrðʉ ↘]「何と仰いましたか？」
what say-you

cf. 英語: *Excuse me?*↗

What did you say?↗（牧野 (2005: 138); 表記は筆者のものに変更）

最後に、聞き手に念を押したり言い聞かせる場合、文末音調は上昇調をとる。文末詞を欠く場合もあるが、用いるとすれば「カ」である（「ン」も可か？）

(11) [エ]エ(カ) ↗「いいですか？」

cf. [エ]エン ↘「いいですか？【良いか悪いかを問う疑問文】」

純粋に「良い」か「悪い」かを問う疑問文の場合は規則的に下降調をとる点に注意されたい。なお、「念押し」や「言い聞かせ」という意図を伴えば、形式上は疑問文でなくとも上昇調をとりうると考えられる:

(12) コ[レデサ]イゴデ↗「これでおしまいだよ。」

【例えば子供にこれ以上おやつがないことを確認させる意図を込めて】

(12)の例は、例えば子供にこれ以上おやつがないことを確認させる意図を込めて発したものであるが、文形式それ自体は疑問文ではないものの、文末には上昇調が現れている。

＊　＊　＊

以上、特に疑問文の文末音調を中心に岡山方言のイントネーションの諸側面について考察してきた。ここで、諸方言との比較対象を通じて、要点の整理を行うこととする。木部 (2013:29 表 1) では、疑問詞の有無、文末音調の種類（（漸次）上昇/（漸次）下降）、文末詞

17 アイスランド語の疑問文の文末音調は、疑問詞の有無を問わず下降調である (三村 2016: 155)。なお、アイスランド語の資料収集は日本学術振興会科学研究助成金による資金援助を受けて実施した（課題番号: 15K16729）。

表 1: 諸方言との比較・対象

方言	文末音調		文末詞の有無と種類
	疑問詞疑問文	yes/no 疑問文	
岡山方言	**下降(非上昇)**	**下降(非上昇)**	**(ノ)ン**
			無し【標準語風か？】
	上昇	**上昇**	**無し / (ノ)ン**【聞き返し】
			無し / カ / ン【念押し・言い聞かせ】
東京方言	上昇	上昇	無し【あるいは「の」】
鹿児島方言(古)	下降	下降	ナ / カ / ヤ / ケ
北九州方言	下降	上昇	無し【あるいは「ン」】
福岡方言(古)	漸次上昇	下降	ナ

の有無、疑問文を作る要素（文末音調と文末詞の何れか、あるいは何れも）の観点から、東京方言、鹿児島方言、北九州方言、福岡方言の疑問文のイントネーションを比較対照している。同様の観点を踏まえて岡山方言の疑問文をまとめると表 1 の通り[18]。

3 今後の課題

以下に述べる五つの点が解決すべき今後の課題並びに問題点として挙げられる。まず第一に、調査方法の改善が挙げられる。本研究ではインフォーマント調査の際に標準語を方言に訳してもらう手法も用いたが、標準語の影響のためか本来の方言形が使用され難く（例: キニョー「昨日」、ノーナス「無くす」)、またインフォーマントによってはそもそも標準語を方言に訳すこと自体が著しく困難であった。岡山方言に限らず、方言イントネーション研究にも該当する重要な問題点である。インフォーマントから可能な限り自然な資料を採取するにはいかなる手法が最適であるか、調査方法の改善が急務である。

第二に、非疑問文も含めて文末音調の詳細な型の分類とその意味の特定が求められる。本発表では、便宜的に下降調と上昇調という二つの型に大別して考察を進めたが、それぞれの型の中で更なる分類はできないか、またその分類と意味（発話意図・内容）との関係はいかなるものか、更なる調査が求められる。

第三の問題点として、先述の二点目とも関連するが、疑問文を表示する「ン」の位置付けが挙げられる。既に本論において言及したが、例えば「(今晩飲みに行くのだが）一緒に行きますか。」のような不確実な情報を問う場合にはそもそも「ン」を用いることができないのではないか（且つ、上昇調を伴うのではないか）という指摘は熟考に値する。「ン」を用いた様々な具体例の分析を通じて「ン」の詳細な意味記述を試み、「ン」を疑問の文末詞として位置付

[18] 木部 (2013: 29 表 1) を基に筆者が作成した。なお、紙幅の都合上、鹿児島方言と福岡方言は新しい世代の変種は割愛した。

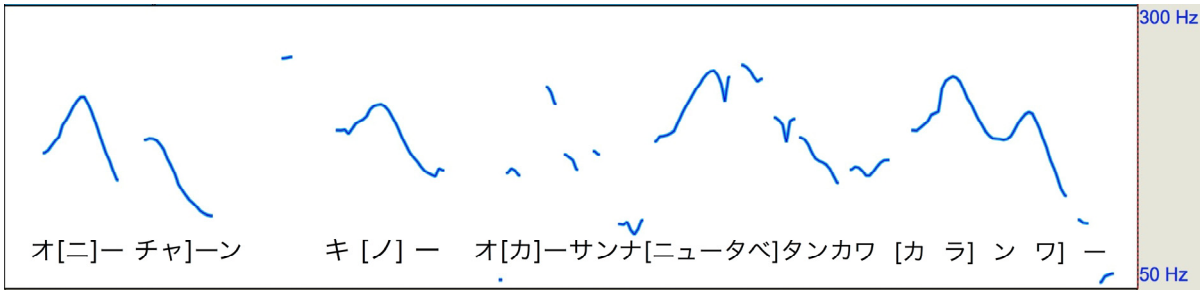

図 5: 呼びかけのイントネーションのピッチ曲線

けることが果たして妥当であるか否か検討が必要である。

さらに、呼びかけのイントネーションの調査も今後との課題として挙げられよう。呼びかけという形式において語を用いた場合、イントネーションは語が本来有するアクセント型を壊すなど何らかの影響を与えるとされる（例: 鹿児島県出水市方言; cf. 木之下 (154: 92)）。現時点では(13)に示した一例のみが確認されているが、岡山方言も同様に、語の本来のアクセントによる音調の下降に加えてもう一箇所音調の下降が現れている（図 5 も参照）:

(13) オ[ニ]ーチャ]ーン ↘（、オカーサン キノーナニュータベタンカワカランワー。）
「お兄ちゃん（、お母さん、昨日何を食べたのか分からないよ）。」

今後、様々なアクセント型の語を用いた調査と分析が求められる。

最後に、イントネーションにまつわる世代差や個人差、性差も明らかにする必要がある。既に本論にて触れたように、問い返しの疑問文における文末音調や敬意と文末音調との関係、文末詞「ン」の使用に関しては年代差や個人差があると考えられ、その詳細の解明が求められる。

また、筆者の内省観察では容認できないものの、インフォーマントの報告では文末詞「ン」を疑問文の返答にも用いることが可能であるという。

(14) a. ナ[ニ（～ナ[ニュー）ノ]ミョーン↘「何を飲んでいるのですか？」
b. (i) ビール(ノミョーンジャ)「ビールです/を飲んでいます。」
(ii) ?*ビールノミョーン↘「【同上】」
cf. ビールノミョーン↘「ビールを飲んでいるのですか？」

今後は多数の話者の協力を得て、文末詞「ン」の用法も含めた年代差や個人差に関する詳細な調査が求められる。

謝辞

本稿に貴重なご意見を下さった二名の査読者にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

本稿は、日本言語学会第 153 会大会ワークショップ「イントネーション研究の新展開」における口頭発表並びに予稿集原稿（三村 2016b）に加筆と修正を加えたものである。同口頭発表に対して貴重なコメントを下さった聴衆諸氏並びに下記の方々にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる: 角道正佳氏、小西いずみ氏（広島大学准教授）、米田信子氏（大阪大学教授）、木部暢子氏（国立国語研究所教授）。なお、同

研究発表は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果を報告したものであることを申し添えておく。

参考文献

藤原与一 (1972).「方言文末詞（文末助詞）の研究」.『広島大学文学部紀要』特輯号 2 号, pp. 1-95.

Ivić, Pavle (1970). “Prosodic possibilities in phonology and morphology.” Eds., Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto. *Studies in General and Oriental Linguistics Presented to Shirô Hattori on the Occasion of his Sixtieth Birthday*. Tokyo: TEC Company for Language and Education Research, Ltd., pp. 287-301.

角道正佳 (1984).「分節音とアクセント（１）: 岡山方言の分析から」.『大阪外國語大學學報』第６４号, pp. 169-184.

亀井孝、河野六郎、千野栄一 (1996).『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』. 東京: 三省堂.

木部暢子 (2000).『西南部九州二型アクセントの研究』. 東京: 勉誠出版.

木部暢子 (2008).「方言イントネーションの記述について」.『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』. 富山: 桂書房, pp. 443-459.

木部暢子 (2013).『じゃっで方言なおもしとか』. 東京: 岩波書店.

木之下正雄 (1954).「出水方言における呼びかけのイントネーションについて」.『鹿児島大学教育学部教育研究所研究紀要』6, pp.92-98

国立国語研究所 (2004).『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第 14 巻 鳥取・島根・岡山』（国立国語研究所資料集 13-14）. 東京: 国書刊行会.

十河直樹 (1973).『岡山の方言』（岡山文庫 56）. 岡山: 日本文教出版.

前川喜久雄 (1997).「アクセントとイントネーション ---アクセントのない地域---」.『諸方言のアクセントとイントネーション』. 東京: 三省堂, pp. 97-122.

牧野武彦 (2005).『日本人のための英語音声学レッスン』. 東京: 大修館書店.

三村竜之 (2016a).「アイスランド語における文音調（イントネーション）の記述に向けて」.『北海道言語文化研究』第 14 号, pp. 147-158.

三村竜之 (2016b).「岡山方言のイントネーションの記述に向けて ---疑問文イントネーションを中心とした予備的考察---」.『日本言語学会第 153 回大会予稿集』, pp. 396-401.

虫明吉治郎 (1954).『岡山県のアクセント（その一）』（岡山県方言の研究・第一号）. 岡山: 山陽図書出版.

虫明吉治郎 (1982).「岡山県の方言」.『講座方言学８ 中国・四国地方の方言』. 東京: 国書刊行会, pp. 58-101.

タルボット, アラン (1979).『岡山の日本語』. 岡山: 出版社不詳.

上野善道 (2002).「アクセント記述の方法」.『現代日本語講座 第３巻 発音』. 東京: 明治書院, pp. 163-186.

上野善道 (2003).「アクセントの体系と仕組み」.『朝倉日本語講座３ 音声・音韻』. 東京: 朝倉書店, pp. 61-84.

執筆者紹介

氏名：三村竜之（みむら・たつゆき）
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科 ひと文化系領域 准教授
Email：m76tatsu@gmail.com